

## 第 34 号の刊行にあたって

学園長 長谷川 量平

鯉淵学園教育研究報告第 34 号をお届けいたします。同号には報文 2 報，事例報告 2 報，解説が 2 報掲載されています。

当校において、「臨床栄養学各論・総論」をご担当されている岩部先生におかれは、神経性やせ症の早期治療に対してのエネルギー量や栄養指導の報告であり、報告が非常に少ない課題に対して、摂取エネルギー量を明確に示し、まさに臨床栄養の報文として素晴らしいものです。

アグリビジネス科学科長である高田先生におかれは、校内の実験鶏舎に土日を問わず出向き、給餌などの管理作業を自ら行い、学生とともに研究をすすめられ、抗生物質の代替物質として酵母 RNA の有用性を検証したもので、現在の畜産業界へ大きなインパクトを与えるものであります。

食品栄養科副学科長である浅津先生らによる事例報告は、2013 年から行われている食品栄養科の教育の特色でもある「調理技術検定」についての評価

です。毎年、食品栄養科の学生が苦勞する切りものへの評価など盛り込まれています。当校に入学するまで、包丁を持ったことがなく、調理の経験のない学生にとっては厳しいながら良い学びの機会になっていることを確信する報告です。

同じく、食品栄養科教育・研究チームリーダーの勝山先生らによる報告は、上述の「調理技術検定」と同じく食品栄養科の教育の特色でもある「食農・食育」教育を報告したものです。全国でも数少ない栄養士養成機関でありながら農場実習をカリキュラムに取りこみ「食育」指導ができる栄養士の養成を報告したものです。

上記の他に 2 編の解説が食品栄養科教員よりあり、第 34 号は前号に続いて食品栄養科教員からの投稿が多く、次号のアグリビジネス科、農業技術センターからの多くの投稿を期待して、巻頭のことばといたします。